

## 子どもたちと共にふるさとの未来を創る

～Good 郡上プロジェクトのさらなる活性化に向けて～



岐阜県郡上市 島田 美保

### 1. はじめに

進行する少子高齢化や、社会状況の変化に伴う個人の価値観や生活様式の多様化などを背景に、全国的に地域のつながりが希薄になりつつある。当市においても、自治会活動をはじめ、祭礼や清掃などの地域活動への参加者の減少や高齢化が進んでいる。地域における人と人とのつながりが希薄になると、地域伝統を次世代へつなぐことが困難となる恐れがあるほか、災害時の助け合いや支え合いなどの活動に支障をきたすことが懸念される。このような状況に歯止めをかけるためには、地域に住む人たちが「自分たちの地域は、自分たちでよくする」という意識を持ち、継続的に地域づくりに参画してつながりを持ち続けることが必要だと考える。

筆者は、これまでに全国地域リーダー養成塾研修で受けた講義や現地視察を通じて、地域づくりには地域を支えリードする「人材」と、その「人材」育成の大切さを学んだ。

そこで本稿では、現在の当市の子どもたちが、将来の当市を担う地域リーダーや、未来を創造していく人材へと成長するため、子どもたちがそれぞれの成長段階において、その段階に適した地域との関わりを持ち、そのプロセスを経てどのような可能性や課題が生まれているか、これまでの当市における取組を事例に検証するとともに、子どもたちが地域づくりに参画することの意義について考察したい。

### 2. 子どもが参画する地域づくりへの取組の現状

#### (1) 郡上市の概要

当市は岐阜県のほぼ中心に位置し、面積は 1,030.75 km<sup>2</sup>と県の面積の約 10 分の 1 を占めるほど広大であるが、その 9 割が森林という中山間地域である。当市は、郡上おどりや白鳥おどりなどの伝統芸能や、世界農業遺産に認定された「清流長良川の鮎」などの農林産物、雪国ならではの個性豊かなスキー場や、天然温泉、史跡など多くの資源に恵まれている。また、東海北陸自動車道が当市を縦断するなど道路交通の利便性が高いこともあり、年間を通して多くの観光客が訪れるなど観光交流が盛んな地域である。



図 1 郡上市の位置

一方で、人口は平成 27 年度国勢調査で 42,090 人と、昭和 25 年をピークに減少し続けている。平成 27 年は前回の平成 22 年に比べ、2,397 人（約 5.4%）減少し、平成 17 年から平

成 22 年の減少率（約 6.3%）と比べると減少傾向は若干緩和したもの、年齢別人口を見ると年少人口の割合が 12.4%、生産年齢人口が 52.9%と過去最低、老年人口が 34.7%で過去最高となり少子高齢化が進んでいる。また、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2045 年には年少人口は 2018 年の約半分、高齢化率は 46.6%となると予想されており、高齢者を支える年代である生産年齢人口 0.93 人で高齢者 1 人を支えることになる。

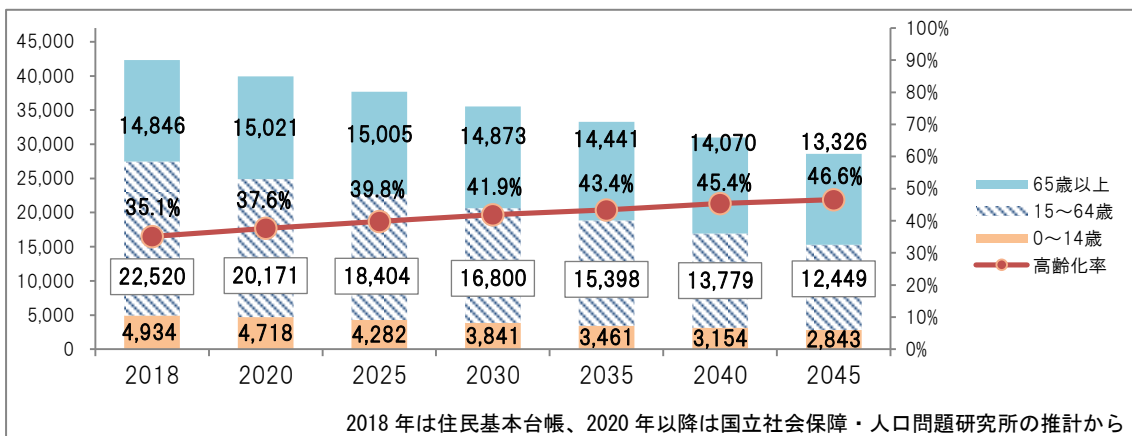


図 2 郡上市の人口推移

(2) 学校の設置状況及び児童・生徒数の推移（平成 30 年 5 月 1 日現在）

市内には、小学校が 22 校（児童数 2,070 人）、中学校が 8 校（生徒数 1,073 人）、県立高等学校が 2 校（生徒数 985 人）設置されている。小中学校の児童生徒数は図 3 のとおり減少しており、合併した平成 16 年には、4,457 人であったが、平成 30 年には 1,314 人減少し 3,143 人となっている。今後さらに減少し、令和 12 年には、平成 30 年の約 4 分の 3 の人数になることが予想されている。市内中学校から市内の高校への進学率は 73~75%程度と例年横ばいで推移をしているが、市内には大学がないことや市外での就職を希望するなど様々な理由で、高校を卒業するタイミングで県内や隣の愛知県へ一度は転出する例が多い。

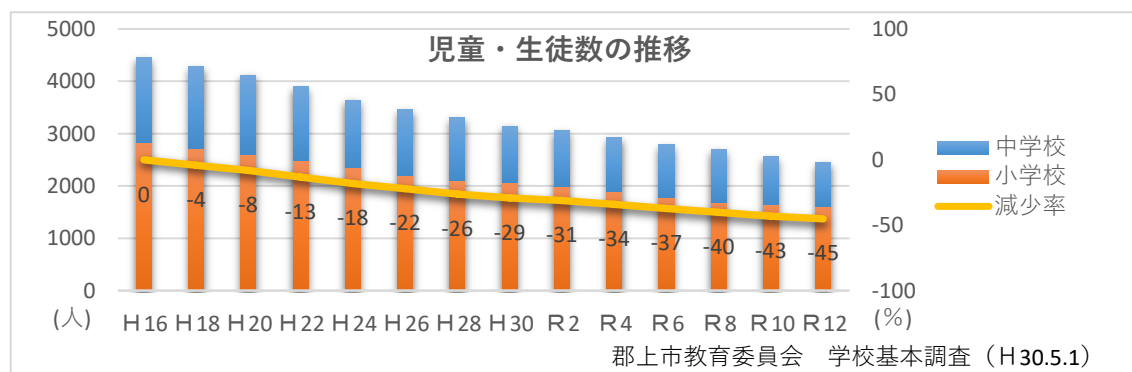


図 3 小中学校児童生徒数の推移

(3) 第 2 期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の基本視点

令和元年 12 月 20 日に閣議決定された、国の第 2 期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（以下「総合戦略」）によると、基本目標のひとつに「地方とのつながりを築き、地方への新しい人の流れをつくる」と掲げ、次のような方針を示している。

「自らの地域を知ることが、将来的な U ターンや地域の将来を支える人材の確保につな

がる可能性がある」ことから、小中高校での「ふるさと教育」等により、地域に誇りを持つ人材の育成を推進することや、「地域への課題意識や貢献意識を持ち、将来、地域ならではの新しい価値を創造し、地域を支えることができる人材の育成に向けて、高校の段階で地域を知り、親しむ機会を創出することが重要である」として、地域と高校が連携・協働して、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進することとしている。また、「若者が地方の魅力を知る機会が少ないことにより、東京での進学、就職を選択していることも東京圏への一極集中の要因の 1 つである」と考えられており、中高生等の早い段階から職業意識の形成を図り、地元で暮らすことの魅力や地元企業の魅力が若者に浸透するよう地域社会全体で取組を推進することとしている。このように国においても若い人材に注視した施策の推進を総合戦略の柱として盛り込んでいる。

当市においても、令和元年度中に第 2 期総合戦略を策定することとしており、第 1 期の検証や人口ビジョンの展望を踏まえた上で、地域づくりの原点に立ち返り、これからの当市を創る「人」に焦点を当てた施策を展開する方針である。

#### (4) 「郡上学」の推進

「郡上学」とは、平成 21 年度から当市が推進する地域学である。「郡上学」を通じて、地域に誇りと愛着を持ち、地域の発展を願い地域に貢献する意欲を高め、地域の担い手を育てることを目的としている。「郡上学」には、①市全体で行う郡上学（郡上学総合講座）、②地域で行う郡上学（郡上学地域講座）、③学校で行う郡上学（子どものための郡上学）の 3 つの柱があり、幼保・小中高・社会人まで、一貫した計画的な「郡上学」を推進している。

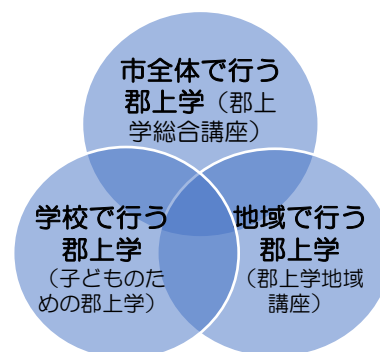


図 4 郡上学イメージ

このうち、学校で行う「郡上学」では、ふるさとの歴史や文化、自然、産業等を調査研究、講義、体験、実践などを通じて楽しく学び、ふるさとの持つ魅力や価値、課題などを幅広く認識しながらふるさとへの愛着を高めるとともに、郡上としての一体感を醸成し、魅力あるふるさとづくりに取り組めるよう資質や能力の向上を図るものと位置づけている。

#### (5) 学校教育における「郡上学」

##### (小学校の例)

市の北西部白鳥町にある、大中小学校（全校児童 104 人）では、「ふるさとに学ぼう」をテーマに「大中学」と題して「郡上学」に取り組んでいる。5 年生の児童は地元に残る太神楽や地域の歴史などを地域の「師匠さん」に学び、運動会などで披露している。

5 年生のある少年は、師匠さんに教わった神社の話などを得意げに話してくれた。また、少年の母親は、「地域の人に可愛がってもらったことや、子ども自身が地域の大人たちのことを覚えるようになり、確実に地域への愛着が深まった。そして、地域で活躍する大人へのあこがれが強くなったようだ」と話している。

(中学校の例)

市の北東部に位置する明宝地域の明宝中学校（全校生徒 31 人）では、中学生として地域のために何ができるかを一人ひとりが考え、地域社会への関心を深める取組を実践し、中学校 3 年間を通じて常に地域と関わりながら、中学生が地域社会の一員としての自覚を持ち地域づくりに参画している。

今年度 3 年生は、カメラを手に町へ繰り出し、食や自然など地域の魅力を住民にインタビューし、PR 動画を作成して「明宝の魅力を体感すること」を実践した。完成した作品は、市のケーブルテレビで放送される予定である。このように、アイデアの提案にとどまらず形に残すことで創造する力を養うとともに、多くの人と触れ合う中で会話力や自己表現力も高めていく仕組みをつくっている。3 年生の生徒は「中学生が地域のイベントに参加するなど、今後も地域と関わり、貢献していける学校でありたい。」と話している。

(高等学校の例)

市北西部の白鳥地域では、以前から「郡上学」の一環として小中学生が自治会や公民館などの地域活動にボランティアとして参加することが定着していたが、高校進学後にこのつながりが途切れてしまっていた。しかし、平成 22 年度に郡上北高校が中高一貫の連携教育を開始したことから、高校生になっても地域活動に参加する環境を整備したことで、地域への思いを継続する流れが生まれた。

平成 26 年度から地元公民館の行事に同校生が関わり始め、翌年には高校生による「公民館応援隊」を立上げ、地域活動への参加が活発化している。平成 28 年度には高校生が自らプランを練り上げた「夏フェスタ」（主に幼児・小学生を対象とした夏祭り）を開催し、それ以降、高校生企画として定着し毎年開催されている。

当時、生徒会役員として企画に関わり、今年度から郡上市役所に勤務している女子職員（Mさん）に話を伺うと、「開催に向けての準備は大変だったが、高校生ですべてをやり切ったことは大きな自信になった。そしてなにより、参加した小学生やお母さんたちに喜ばれたことがうれしかった。」と話した。Mさんは、高校卒業後は市外の短大へ進学し、その後当市へ戻り就職することを決めた。それには「高校生時代の経験により多くの地域の大人と知り合うことができたため、安心して帰ってこられた。」と、高校時代の地域活動参画への経験が、Uターンの動機の一つとなっていると話した。

さらに、郡上北高卒業生へのインタビュー（令和元年、郡上市政策推進課）によると、高校在学中に、夏フェスタをはじめとした様々な地域活動や、後述する「Good 郡上プロジェクト」への提案などを行ってきたAさん（現在大学 1 年生）は、これらの活動の経験を通じて、「若い世代が郡上市の課題を当事者として考えることが大切。現在は大学の地域社会学科に進学し、地域が抱える問題についての専門知識を身に付けるために勉強している。郡上市に貢献できる人材となり、郡上市をプロデュースできるよう成長したい。」と語っており、地域のために地域を担っていこうとする若者の頼もしさを感じた。

(6) 地域活動への参画による郷土愛醸成

前述は学校での取組の一例であるが、市内各校においても特色ある取組がされている。子どもたちのそれぞれの成長段階に合わせ、段階的かつ継続的に地域と関わり続けることで、自己の役割を見出していると言えそうである。

小学校低学年では「触れる」ことや「感じる」ことなど地域に親しむことから始まり、高学年に進むにつれ「気づき」「関わる」ことに発展している。中学生では、自身が地域の一員であることを自覚するとともに、自ら「考え」「行動する」ようになり、高校生になると地域のことを自分事として捉えるようになり、地域への思いをより深めている。

これらは、全国学力・学習状況調査の結果にも表れている。

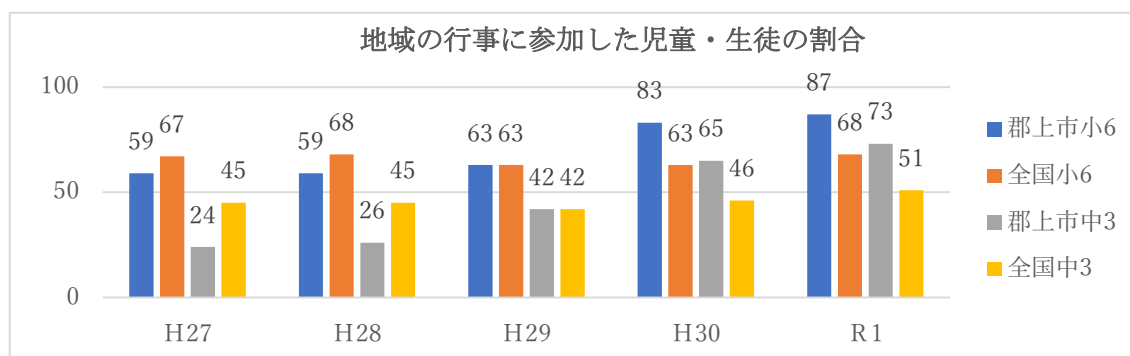


表 1 小中学生の地域活動への参加率 (H27～H30 全国学力・学習状況調査)

また、郡上北高校の教員によると、地域と連携した取組を始める前の地元企業への就職希望者は 30～40%で推移していたが、平成 27 年度には 70%前後で推移するまでになり、この増加傾向は進学希望者にも見られるとのことである。教員は、「生徒が地域とつながる事には大きな意義がある。地域課題を探究する力や発想力が自然と高まり、それが郷土愛への醸成に結びついている」と話した。地域への愛着が深まることで、「地元に残りたい、戻りたい」という定住意識が高まり、結果として地元への定着につながっていることが推測される。

図司ゼミナールの先駆的地域づくり現地視察で訪問した高知県梶原町においても若い世代の人材育成に注力した施策に取り組んでいた。夏休みを利用して梶原高校の生徒に地域のヘルパー体験を実施したところ、地元での就職志向が高まり、結果として町立病院の看護師の確保につながっていた。

また、えちごトキメキ鉄道代表取締役の鳥塚亮氏は、いすみ鉄道の社長に就任していた当時の経験から、「子どものころに経験したことがあるかどうか、自身の「原風景」となり大切な場所となる」として、列車の窓ふきや掃除、子どもたちの遠足での利用、列車での高校生の音楽演奏会や中学生のアテンド体験を行うなど、できるだけ子どもとの関わりを持っていると述べていた。

3. 学校から地域へ飛び出した「Good 郡上プロジェクト」の取組

(1) Good 郡上プロジェクトとは

郡上市市民協働センター（以下、「センター」という。）の取組の一つに、中高生から地域の課題を解決するための提案を募集する「Good 郡上プロジェクト」がある。センターは、平成 24 年に設立され、市民と行政の間に立って課題等を調整する中間支援組織としての役割をもち、市民の地域づくりの活動拠点として、地域づくりに関する様々な相談窓口、各種支援やコーディネート、啓発事業、人材育成・研修事業、情報発信等の業務を担い、まちづくりを推進している。

この事業は、センターが設立された平成 24 年度にスタートし、今年度で 8 回目となった。中高生が地域にどんな課題があるかを見出し、それを解決するためのアイデアをブラッシュアップし提案するものである。

提案を実現し課題を解決するために、「自分たちで行う活動」と「協力者が行う活動」を具体的にイメージし、実現可能な事業や活動としてまとめ上げる。出された提案は選考会で審査され、プロジェクトの趣旨に合致した優れた提案から「入賞」、「入選」が選ばれる。入賞した提案は「まちづくりフェスティバル」（センターが開催する地域活動団体の交流・発表の場）で提案者が発表し、それに賛同した市民団体などが協力者となることで、協働によるまちづくりを具現化していく。

センターでは、小中学校で学んだ「郡上学」のまとめの場として「Good 郡上プロジェクト」を活用してほしいという思いもあり、学校を通じて募集をしている。一連の活動プロセスを通じて、若い世代の地元志向の意識を高めたいという狙いもある。

また、生徒たちが作業を進める上で、各分野において豊富な知見を持ち、アドバイスができる地域住民や、企業・市民活動団体の大人たちをアドバイザーとして派遣している。まさに、学校を巻き込んだ、子どもたち主体の地域づくりである。

## （2）提案の具現化プロセスから得られた成果

これまでに具現化した提案の中から、現在も活動に広がりを見せている 2 つのプロジェクトを例に、どのようなプロセスを経て成果が得られたかを検証する。

### 【中高生鮎釣り選手権】

平成 26 年度にこの提案をした中学 3 年生 5 人のグループは、郡上は鮎の友釣りが盛んだが、地元の釣り人の高齢化が進んでいることを課題と捉え、若い世代にも鮎の友釣りに対する関心を持ってもらおうと、「中高生の鮎友釣り大会」を提案した。さらに、参加者の技術向上や、減少傾向にある地域の鮎釣り人口を増やそうと、大会前に鮎釣り



写真 1 中高生鮎釣り選手権

教室を計画した。そしてこの提案は、生徒たちの想いに共感した市民らとともに、実現に向けて動き出した。

生徒たちはそれぞれ高校へ進学した後も、1 年がかりで実行委員会を組織し、関係団体の支援を受け、漁協や釣り団体に運営協力を得て、まずは小規模ながら郡上市内で第 1 回となる「中高生鮎釣り選手権」を開催できた。

当時の担任の教員は、次のように話している。「生徒たちが「本当にできるのか」と心配する中、協力者となった自分たち教員も、「やろうと思えば絶対できる」という信念を持ち、できる限り生徒が主体的に活動できるよう支援した。また、学校外の多くの人と関わることで、確実に社会性を培うことにも結び付いている。提案した 5 人は今年度成人する年齢となり、2 人が地元企業に就職し、他の 3 人は市外の大学等へ進学したが、選手権の日には必ず帰ってきて、運営の手伝いをしてくれる。自分たちが作り上げた行事が継続されていることで、選手権への想いや地域に対する愛着、誇りが深まったと考えられる。」

加えて筆者が図 5 のようにまとめたプロセスを通して、「この成功体験が生徒たちに自信をもたらし、次の開催、さらなる向上への意欲へとつながったのでは」と、教員は生徒の変化を分析していた。

1 回目の開催を契機に、協力者となった市民らによる「郡上鮎の会」が発足しその後も開催を支援している。この教員も鮎の会のメンバーとなり、別の学校へ転勤した今も継続して活動に関わっている。

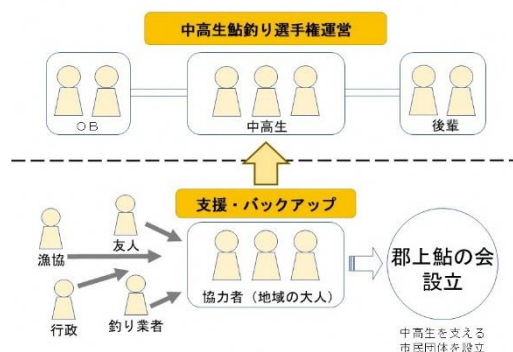


図 5 鮎釣り選手権の広がり

### 【ゆかた DAY をつくろう】

平成 27 年度に中学校 3 年生のグループが、人口減少傾向にある当市の現状を受け止めて、当市に古くから伝わる伝統芸能「郡上おどり」を PR するため、まちの人が一日中ゆかたで過ごす「ゆかた DAY」を提案した。

翌年、同中学校の生徒会執行部が中心となり、先輩たちの意思を受け継ぎ、学校支援の元で 1 回目の「ゆかた DAY」を開催した。全校生徒が学校で郡上おどりを踊り、その後、学年ごとにそれぞれのテーマに分かれ郡上おどりの PR を行った。

この年以降、「ゆかた DAY」は生徒会執行部が中心となって企画し、毎年工夫を加えながら開催を続けている。現在では、PTA や近隣住民の協力を得て生徒たちの着付けを行い、浴衣姿になった生徒たちがまちのおどり会場へ繰り出していく。そして、郡上おどり保存会の協力を得て、地域住民や観光客と共に郡上おどりを楽しむ。その際、保存会のおどり屋形を特別に借りて、中学生によるお囃子演奏で踊るという貴重な経験もしている。

地域の方は、浴衣がない子どものために、家庭で使用しなくなった浴衣を寄付したり、高校生も事前に浴衣の着付教室を行うなど、全面的に応援している。また、暑さ対策のため消防署がミストを貸与するなど、生徒たちへの応援は年々広がりを見せている。そして中学生たちは、ゆかた DAY を通じて地域の人に感謝の気持ちを伝えている。

以前、この中学校に勤務し、生徒と地域をつなぐコーディネーターとして関わった教員は、「この行事がきっかけとなり、郡上おどりに参加する生徒数が増えた。また高校進学後も「おどり皆勤賞」を目指すほどの踊り好きになった子どもが育ち、地域の伝統芸能への関心や理解、深い愛着を持つことに結びついている。」と話している。



写真2 ゆかた DAY

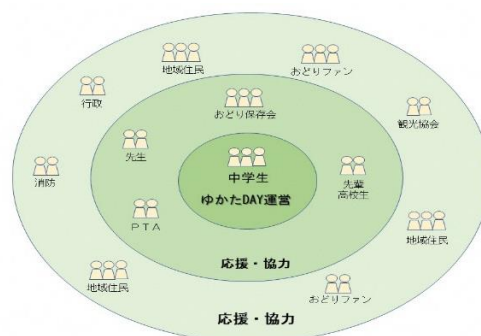


図6 ゆかた DAY の広がり

### (3) 二つのプロジェクトで得た学びと課題

これらのことから、生徒たちは、提案を実現させるまでの過程で、地域への愛着形成や社会性、自主性、対話力など社会生活に必要な能力を身に付けるとともに、自身が社会の一員として果たすべき役割を自覚するようになってきていることが伺える。ここで重要なことは、協力する大人たちが、子どもたちの提案をしっかり受け止め、子どもたちが社会の一員であることを認識し、実現するために何ができるかを一緒に考え支援している点である。

その中で、大人側も改めて地域を捉え直す機会となり、その気づきを行動に移す大人の姿を見た子どもたちがさらに意識を高めていくという、都市農山村交流の「鏡効果」のような世代間の相乗効果を生み出している。

こうした成果を得られている反面、平成28年度から30年度の間3年間で、19の提案が入賞したが、このうち具現化されたものは5提案で、そのほとんどが継続されておらず、地域に関わりたいという子どものニーズにどう対応するかが今日問われている。

### (4) Good 郡上プロジェクトが果たす役割と可能性

現在、各地で「ふるさと教育」をはじめとした、子どもたちの地域への愛着形成を図る取組や、学校と地域との連携・協働を推進する「コミュニティスクール」の構築等が実施されている。また、リーダー塾主任講師の田村秀氏は、講義において高校魅力化による地方創生の実例を紹介し、国においては地域の实情に応じた魅力ある教育体制に注視していることを述べられた。

当市では、郡上学の定着やGood 郡上プロジェクトへの取組を通じて、上記に近い仕組みが構築できていると言えよう。実践事例もあり、加えて、あとは「人」をどう動かしていくかが焦点となる。また、特に、Good 郡上プロジェクトの先駆的な点として、子どもたちは将来の地域の担い手であると同時に、現在の地域社会の担い手として、大人とともに「地域社会の一員」という位置づけがされている点である。

少子高齢化等により、地域の祭りやボランティア活動、自治会活動など身近なコミュニティとの関わりが希薄になる中、子どもたちが、単に大人が用意した地域活動を「手伝う」というレベルの関わりを超え、「主体的に考え、行動に移し、実現させる」このプロジェクトが果たす役割は大きい。加えて、子どもたちが考える地域の課題解決や未来について、それを実現しようとする大人が増えることで、子どもたちが挑戦する機運にも結びつくの



ではないだろうか。

#### 4. 今の自分にできる一歩 今年度のプロジェクト提案の実現に向けて

今年度のプロジェクトには、中高生 470 人が参加し、124 もの提案が出された。その内、入賞 5 提案（中学 4、高校 1）、入選 7 提案（中学 6、高校 1）が選ばれた。そこで、表 1 にある、郡上北高校が提案した「ゆったり健康になろうプロジェクト」の実現に向けて、今後関わりを持ってサポートを試みたい。

ゆったり健康になろうプロジェクト！	
提案者	郡上北高等学校 2 年生（3 名）
課題	健康づくりの指針である「日常生活における歩数」「運動習慣者」「意欲的に運動を心がける人」の割合が年々減っており、岐阜県が目標としている数値にも届いていない。
提案内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堤防や河川敷、山の近くなどに、1 周 6~7km で見どころのある散策コースを作る。コースには 1.5~2km ごとに休憩スポットを作る。季節ごとの花や木を植えたり、コースの途中にクイズを掲示したり、休憩スポットにスタンプを設置して集めてもらったりする。</li> <li>・たくさんの見所を作ることで意欲的に運動をする人が増加し、「日常生活における歩数」や「運動習慣者」が増えると思う</li> </ul>
自分達で行う活動	散歩コースの検討。季節ごとの花や木の調査。スタンプとクイズ、キャラクターパネル、郡上の歴史に関する看板、周知ポスターの作成
協力者が行う活動	散歩コースの安全確認、休憩スポットの設置、マップの作成。道の駅や飲食店への協力要請。パネルや看板の設置。スタンプカードの配布。ポスターの掲示

表 1 2019 年 Good 郡上プロジェクト提案内容

令和 2 年 1 月に、高校生、教員、協働センター職員、市健康課職員で 1 回目のミーティングを実施した。高校生が具体的に考えた提案に基づき、当市の旧 7 町村ごとに、主に道の駅を拠点としたウォーキングコースを考案し、マップを作って市民に配布することを目標に据え、まずはどこか一つの地域でウォーキング大会を開催する方針が定まった。いずれも、生徒たちが 3 年生となる来年度の実現を目指している。

その中で市職員が、参考となるパンフレットを生徒たちに提示し、マップのイメージを伝えたところ、皆が大きくなずき、形になる事への期待感が見て取れた。また、実現までのスケジュールなど大人側が抱えている心配とは対照的に、高校生は「大変だとは思わない」「できると思う」と、とても前向きだった。

高校生がこれまで関わりがなかった地域もあるため、初めての地域でどのようにコースづくりを進めていくかの議論や、地域住民に親んでもらうための工夫も今後必要になるだろう。そのために、地域住民にもコースづくりに関わってもらえるよう市やセンター職員がつなぎ役となり、各地域で活動する市民団体等へと協力者を広げていけるとよいだろう。また、大会を開催する際には、健康づくり団体やスポーツ団体等から大会開催のノウハウを教わることも有益だろう。

さらに、ケーブルテレビや市の広報媒体等を活用して、取組の様子を市民に周知するなど、市民に関心を持ってもらうための仕掛けも肝心ではないだろうか。

筆者自身もこれまでの市職員としての勤務経験で築いたネットワークを活かし、高校生と地域とがつながるようサポートを試みたい。そして大会が開催されるときには、スタッフとして或いは、家族や仲間を誘ってぜひ参加者としても関わりこのプロジェクトを盛り上げていきたい。

実現までの道のりは長そうだが、実現に至るまでのプロセスの中で子どもたちが多くの地域住民と関わり多くのことを学び、社会性の向上や地域への愛着、誇りがさらに深まることを願う。そして、将来の当市を担う地域リーダーへと成長し活躍してくれることを期待したい。

## 5. おわりに

以上の分析を通して、Good 郡上プロジェクトが活性化することで、結果として地域の活性化へとつながることもわかってきた。中高生からの具体的な提案は定着してきたため、今後は協力者の主体の輪を広げていくことが課題となるだろう。

そこで、これまでプロジェクトに関わりが薄かった企業や地域の高齢者などへも協力の輪を広げていくことを考えたい。子どもたちにとっては多様な人たちとの交流の機会となり、企業は将来の従業員確保につながる可能性があり、地域の高齢者には生きがいややりがいにつながるなど、様々なメリットが考えられる。プロジェクトのさらなる活性化に向け今後も考察を試みたい。

当市で成長した子どもたちが、進学や市外での仕事の経験を積むために、ふるさとを離れる例は少なくない。しかしその後は、様々なスキルを身に付けて地域に戻り、地域を担うリーダーとして郡上で活躍してほしいと願う。そのために、子どもも大人も「自分たちの地域は、自分たちでよくする」という共通理念のもと、子どもたちが主体的に参画する地域活動に大人たちが寄り添い、向き合い、尊重しそれぞれの役割を果たしながら、共に地域社会の改善を図り、帰ってきたい、住み続けたい、貢献したいと思える地域づくりを続けていかなければならないだろう。

本稿の作成にあたり、関係者への取材を行うことで想像上の理論では明らかにできない様々な生の声を聞くことができた。この生の声こそが、地域づくりの手がかりであり、実際に現場へ出て見聞きすることや体感すること、共感することの価値を実感した。市役所職員という、地域や住民と密接な関わりを持つ立場として、また、子どもたちが想像する未来をともに叶えていける大人のひとりとなるために、事上磨練の精神で実際の現場と向き合います行動に移していきたい。そして行動の先に見えた道筋を、ともに切り拓いていける主体が増えるよう、子どもたちが参画する地域づくりの価値を発信していきたい。

### 【参考文献、引用、ホームページ等】

平成 27 年度国勢調査

内閣官房・内閣府 総合サイト <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/>

第 2 期まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和元年 12 月 20 日閣議決定）

郡上市 第 2 期まち・ひと・しごと創生総合戦略（案）

郡上市教育振興計画（2019～2024）

郡上市市民協働センターホームページ <https://www.gujo-siminkyodo.org/>

全国学力・学習状況調査